

豊浦寺の調査

(昭和55年3月～昭和55年4月)

この調査は、向原寺薬師堂（天保5年建立）の解体移築工事にともなう発掘調査で、現薬師堂敷地を中心に66㎡の面積を発掘した。

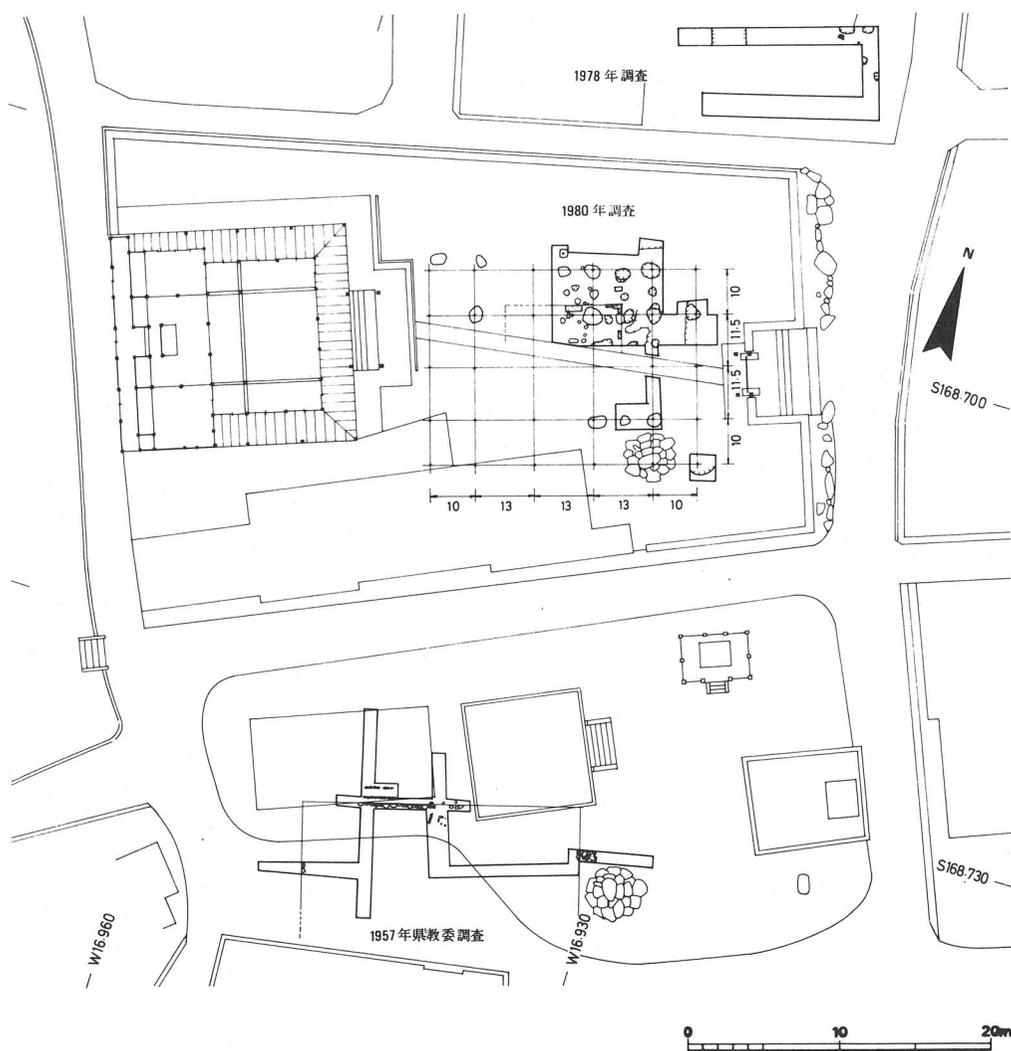
この地は古来より、旧向原寺あるいは豊浦寺の寺跡に比定され、それに関して論述したものも多いが、原資料がとぼしいこともあっていまだ往時の伽藍の全容を想定するまでにはいたっていない。しかし、1957年の奈良県教育委員会による部分的発掘、1960年以降の当研究所の行った数カ所の小規模な発掘等で、この付近一帯が飛鳥時代草創の寺跡とみられ、かつ、中世まで盛衰をくり返しながらも大規模伽藍として存続していたらしいこと、建物の軸線はいずれも北で西へ約18°～20°の振れがあること、などが判明している。

発掘前の状況は、現薬師堂敷地内に約0.3mの高さで亀腹風に土盛・築成し



調査地全景（南西から）

ていた。発掘に先立ち、これらを除去したところ数個の自然石礎石とともに、その抜取跡、仏壇を画するとみられる凝灰岩切石列、などが現われ、しかも、これらが地表面ともども木炭混りの灰層によって覆われていて、明らかに焼失したことを示していた。この礎石は、現境内の既露出礎石と同時期・同建物のものとみてよく、両者を結ぶことによって、桁行5間、梁行4間の仏堂を復原することが可能である。建物はほぼ南面するものの、その軸線は約18°の振れがある。礎石中間にあるやや小形の石を床束石とすると床板張りの堂となるが、その場合、凝灰岩切石は床を切り込んで設けた造り付け仏壇の地覆石とみられ



遺構配置図 (1 : 500)

よう。なお、本堂前西方の2個の礎石はこの線にのらないので、あるいは移動しているのかも知れない。

発掘区中央で、南北の軸線にそって幅0.7mのトレンチを設け土層の観察を行った。その結果、基壇は0.45mの厚さに、黄褐色粘質土と暗褐色砂質土とで交互に版築されていて、さらにその下には、約1mの厚さにわたり、前版築よりは一段と荒く、かつ、土質も異なる下層の版築が重なって存在していることがわかった。しかも、両者の間には灰層が断続的に連なっていた。下層版築より下は、自然堆積層で、上の方からは古墳時代中期の土師器・須恵器片が混るものの、下の方に行くに従い無遺物層となる。一部分2.5mまで深掘りしたがそれでも地山には達しなかった。

以上のことから、自然堆積層上に築成された初期基壇は、ある時期火災を被る、その上に改めて第2次基壇が築成されたのが、現境内露出礎石とみあうものである、やがてそれも焼失する、そして、その後現薬師堂のための土盛を行った、という3期の過程をさぐることができる。

それぞれの時期については、現時点では明確になしえないが、建物その他から次の推定が成り立つ。すなわち第2次基壇にともなう建物の焼失は、上面灰層の中から室町時代後半の土師器の皿があることから、この頃とみてよく、その築成は、巴文・唐草文で構成される中世初期の軒瓦が焼けた状態で比較的まとまって出土すること、復原堂がいわゆる三間四面堂の古式をもつものの床板張りであること、仏壇地覆とみられる凝灰岩が転用材であることなどから、鎌倉時代の初め頃とすることができよう。

一方、初期基壇については断面観察にとどまったこともあって、時期とともにその規模なども判然としないが、表面採取した単弁蓮華文軒丸瓦の時期—7世紀中頃—とみられなくもない。

いずれにしても今回の発掘は、ごく小範囲のことであり、この地が中世再建堂の跡地であり、かつ、前身堂が存在したという事実をあげるにとどめ、さらに今後の調査に期待したい。